

古着からみやげものへ

— モンの手仕事と民族性 —

宮脇 千絵*

本稿は、タイのチェンマイでみやげものへと加工される山地民の手仕事に、モンのものが多い理由を考察することで、自らの身体から切り離れた衣服が遠く離れた地で消費されることの意味を明らかにするものである。

国際的な観光都市であるチェンマイでは1970年代ごろから山地民の手仕事を加工したみやげものが販売されるようになった。みやげものの種類が服飾小物や布製品から、次第に洋服をベースとしたものに移り変わるに従い、その原材料として山地民が着古した古着の需要が高まった。その供給地となったのが国境を隔てた中国雲南省文山チワン族ミャオ族自治州である。

本稿では先行研究からチェンマイにおいて山地民の手仕事をみやげものに加工するプロセスについて整理し、中国から古着が運ばれるようになった経緯を把握する。そしてこれまでほとんど記述されてこなかった雲南省文山でのモンの古着の収集、流通のプロセスについて、そこに携わる漢族の仲介者の実践を通して詳述する。そしてみやげものに加工されるものにモンのものが多い理由について6つの点から考察をする。

モンの古着が国境を越えて運ばれていくのは、漢族の仲介者にとっても文山のモンにとっても幾つかの要因の重なりによって自然に選択されたものだといえる。しかし一方で、手仕事が失われつつある現在、大量にストックされた古着はモンにとって新たな意味を帯びる文化的なレポジトリになる可能性を秘めているのである。

キーワード

モン (ミャオ族)、手仕事、みやげもの、雲南省、チェンマイ

目次

- | | |
|------------------------------|----------------|
| I はじめに | IV 雲南省からの古着の流通 |
| II 問題の所在 | 1 文山での古着売買の始まり |
| 1 モンの衣服の商品化 | 2 古着の収集 |
| 2 手仕事のみやげもの化 | 3 仕分けて梱にする |
| III チェンマイにおけるモンの手工芸品の商品化プロセス | 4 国境を越える運搬 |
| | V モンのものが多い理由 |
| | VI おわりに |

* 南山大学

I はじめに

中国雲南省文山チワン族ミャオ族自治州（以下、文山と表記）¹では、少数民族ミャオ（苗）族²のうちモン（Hmong）と自称する人びとの衣服が、1990年代ごろから既製服として販売されるようになり、それまでの染織や刺繍などの手仕事は失われつつある。既製服を買えるようになったことで、蒙の女性たちは染織など衣服製作の重労働から解放され、手仕事では限界があった色・模様・衣装形態を表現することを喜び歓迎した。一方で、徐々に手仕事をしなくなっていったモンから、その古着を買い取る漢族の仲介者が現れるようになった。彼らは蒙の村々を周り、手仕事が施された古着、すなわちスカートや前掛け、上衣などを二束三文で買い取るのである。当時、農業を生業としていた蒙の人びとにとって、これはまたとない現金収入の機会となった。蒙の人びとは、古着の行き先に無頓着であったが、これらはさらに幾人かの仲介者の手を経て、雲南省西双版纳州からラオスへ、そして北タイのチェンマイへと運ばれていくのである（図1）。

チェンマイでは、1970年代ごろから、山地民³の染織や刺繍などの手仕事を加工したバッグ、ポーチ、テーブルクロスなどのみやげものが、ナイト・マーケットなどで観光者向けに販売されてきた。例えば、チェンマイのモンとミエン（Mien）⁴の手仕事は、同時期に商品化が進められたし（Cohen 2000: 58）、同じくチェンマイのアカ（Akha）⁵も、積極的にみやげもののビジネスを展開し、チェンマイのみならずバンコクやタイ南部の観光地にも販路を広げていった（Trupp 2015）。しかしながら、みやげものの主流は蒙の手仕事を加工した手工芸品であった。なぜその多くが蒙のものだったのか、そしてなぜ中国雲南省から蒙の古着をわざわざ運んでくる必要があったのだろうか。

本稿では、チェンマイにおいていかに山地民の手仕



図1 モンの古着の流通経路（筆者作成）

事がみやげものとして商品化されてきたのか、そのプロセスを先行研究から整理する。そして、中国から古着が運ばれるようになった経緯を把握し、これまでほとんど記述されてこなかった中国雲南省文山での蒙の古着の収集、流通のプロセスについて、そこに携わる漢族の仲介者の実践を通して詳述する。そしてみやげものに加工されるものに蒙のものが多い理由について明らかにする。

衣服、とりわけ人びとの民族的アイデンティティを表象する「民族衣装」は、所与のものとして存在するのではなく、ある集団のメンバーが他の集団のメンバーと区別するために差異化に重点を置いて着用するものである（Eicher & Sumberg 1995: 30）。つまり、「民族衣装」とは自然環境や歴史、文化のなかで育まれてきた伝統的な衣服をベースとしながらも、他者との接触を契機にあらわれる状況依存的な服なのである（宮脇 2022: 123）。着用者のアイデンティティを伴って初めて「民族衣装」という意味が立ちあらわれてくるも

¹ 文山チワン族ミャオ族自治州は雲南省の東南部に位置し、ベトナムと国境を接している。州内は、文山県、砚山県、西畴県、馬関県、麻栗坡県、広南県、富寧県、邱北県の8県に分かれる。州内の居住者は漢族の他、チワン族、ミャオ族、イ族、ヤオ族などの少数民族が人口の約半数以上を占める。

² 本稿では、中国で「少数民族」として公認されている人びとについては「～族」と表記する。

³ タイでは北部の山地に住む人びとを「山の民」を意味する「チャオカオ」（chao khao）と呼ぶ。本稿ではこれを山地民と表記する。山地民にはモン、ミエン、アカ、ラフなどが含まれる。

⁴ 中国西南部、ベトナム、ラオス、北タイに居住する人びとで、中国ではヤオ族、ベトナムではザオと呼ばれる。

⁵ 中国雲南省のハニ族の一部とルーツを同じくする人びと。ラオスやミャンマーにも居住する。

のだといえる。しかしながら、みやげものになるということは、それを着用するはずの身体からも、その文化的・社会的な文脈からも切り離されることを意味する。それに関わらず、モンのものであることの必要性はどこにあるのだろうか。これを考察することは、自らの身体から離れた衣服が遠く離れた地で消費されることの意味がモンの人びとにどのような影響を与えるのかを明らかにすることにも繋がる。

II 問題の所在

1 モンの衣服の商品化

モンは中国雲南省からベトナム、ラオス、タイにかけて居住する人びとである。中国ではミャオ族と呼ばれる。ミャオ語はシナ・チベット語族ミャオ・ヤオ語群に属し、ミャオ語は3大方言・7次方言・18種方言に分類される(羅・楊 2004)。3大方言とは、湘西方言(話者の居住地域は湖南省西部)、黔東方言(貴州省東部)、川黔滇方言(貴州省西部から四川省、雲南省)である。その方言ごとに自称も異なり、湘西方言を話す者はコー・ション、黔東方言を話す者はムー、川黔滇方言を話す者はモンと自称する。

このうち川黔滇方言を話すモンの一部は、清代に雲南省からベトナム、ラオス、タイなどの東南アジア大陸部に移動した。ベトナムでは53の少数民族のひとつとして、ラオスでは高地ラオ⁶、タイでは山地民として認識されている。さらに、モンは欧米にも居住する。



写真1 文山の定期市で販売されるモンの既製服
(2018年3月4日撮影)

ラオスのモンは、山岳地域に精通していることから、ベトナム戦争時、米軍に特殊攻撃部隊として訓練され共産主義勢力(パテート・ラオ)と戦った。だが1975年にサイゴンが陥落し米軍が撤退した後、置き去りにされたモンは共産側から報復されることとなる。そのため多くのモンがタイへ移動、難民キャンプに収容されたのち、その一部が1976年以降アメリカ、オーストラリア、フランス等の欧米各国に難民として移住した経緯をもつ。モンは、中国ではミャオ族の下位集団であるが、それと同時に国境を越えて世界中に広く居住する一大勢力を構成している。

かつてモンの女性たちは大麻を植え、その繊維を糸にし、布を織り、染め、刺繍をして家族の衣服を仕立ててきた(宮脇 2017)。衣服製作は一貫して女性の仕事であり、その技術の良し悪しや、新年に家族の衣服を滞りなく準備できるか否かが、女性の資質として周囲の人びとから評価されてきた。モン女性の服は、居住地域やサブ・グループによってデザインやスタイルの違いは見られるが、藍によるろうけつ染めやクロス・ステッチを主とした刺繍が施されたプリーツスカートが代表的である。

一方でモンの衣服は早くから商品化もされてきた。商品化にはいくつかのパターンが見られる。第一に生産者も消費者もモンであるパターンである。このようなモン間での流通は、素材やデザイン、スタイルなどがいわゆる「伝統」に留まらず、変化していくことが特徴である。雲南省文山では、1990年代ごろから工業製の化繊布や機械刺繍布、ビーズやレースなどが取り入れられた既製服が生産、販売されるようになった(宮脇 2017)(写真1)。モンの女性たちは衣服製作にまつわる重労働から解放されるとともに、工業製品という「近代」を身につけること、またカラフルで多様な工業製の布をミシンで縫製することで新たなスタイルや流行を楽しめるようになったことを歓迎した(宮脇 2024)。また文山でのモンの衣服の既製服化は、アメリカ、フランス、オーストラリアなどに居住するモンへ販売することを目的に拡大していった。同じ衣服を着ることによってモンのコミュニティのグローバルな連結が加速され、従来認識されていたサブ・グループの境界を無化するような「汎モン」ともいべきアイデンティティが構築されている(Shi 2022)。モン

⁶ ラオスでは民族がその居住地域の高低によって、低地ラオ(タイ系語族)、山腹ラオ(モン・クメール語族)、高地ラオ(モン・ミャオ語族、チベット・ビルマ語族)の3グループに呼び分けられている。

は世界各地に居住しながらも、どの国においてもマイノリティの立場に置かれており、だからこそアイデンティティの表象のひとつとして衣服や刺繍などの手仕事を受け継ぐことを重視してきた。モン間での国境を越えた衣服の売買は、モンという民族意識の強化と、それぞれの国の社会に適応することの揺らぎの中で展開されてきたものであり、そのため製法や素材、デザインがその時々で新たに更新されているのである。

他方、モン以外の人びとを消費者とした流通経路も拡大していった。このような流通では、大麻や藍などの天然素材の使用、染織や刺繍といった手仕事の「伝統性」が評価される傾向にある。第二に挙げるのは、博物館や美術館に収蔵されたり、個人のコレクションの対象となったりするものである。中国では少数民族地域での観光開発が進んだ1980年代以降、少数民族の服飾に関する展覧会が国内外で相次いで開催された⁷。そこで展示されたものの代表格がミャオ族のものであり、その手仕事の豊かさが国内外で評価され、コレクションの対象となっていく⁸。その後、北京など都市部にミャオ族の衣服を販売する市場が形成された⁹。このマーケットの特徴は、そのほとんどが古着であり、衣服がそのままの形で流通することである。手織り、藍染め、刺繍などの手仕事と独特な衣服の形態が美的価値を伴い、アンティークとしてモン以外の人びとによって評価される。

第三に、また違った様相を見せるのが、本稿で対象とするチェンマイを中心としたみやげものの展開である。観光者という他者に向けて、手仕事に「伝統性」が見出されるものの、衣服の形のまま売買されることは少ない。みやげものにして持ち運びしやすいサイズや購入後の実用性が求められるため、それらはショルダーバッグやテーブルクロス、クッションカバーやベッドカバーなどに加工されるのである。

このように蒙の衣服あるいは手仕事の流通には、その消費者が誰なのかによっていくつかパターンが見られる。第一のモン間での流通は、国境を越えたダイ

ナミックさを備えながらも基本的に民族的他者の介在がないため、その時々生活に沿った、言い換えれば彼らの間の流行や利便性の追求に適ったデザインやスタイルが求められていくことになる。一方で第二、第三の流通は、モン以外の人びとを消費者としているため、他者からの評価が加わることになる。ジェイムズ・クリフォードが「芸術＝文化システム」と呼んだ非西洋のモノを収集、分類し価値づけてきたシステムの分析枠に照らすと、第二の流通は「伝統的な文化」や「芸術品」といった「真正性」の高いものへのルートであり、第三の流通は「伝統的な文化」ではあるものの「商業的」な傾向の強い「ツーリストアート」といった「非真正」なものへのルートだと捉えられる（クリフォード 2003: 283）。本稿が扱う第三の、みやげものとしての民族的他者への流通に関しては、それがいかに、そして誰にとって真正か否かという問いを突きつけられることになる。

2 手仕事のみやげもの化

実際に北タイでの山地民の手仕事の商品化、すなわちみやげものに関しては、真正性をめぐる議論が多く蓄積されてきた（cf. Cohen 1988; Cohen & Cohen 2012）。それは北タイの山地民を対象とした観光が、典型的なエスニック・ツーリズムであるからである。

橋本は、観光スタイルに特徴的なみやげものを特定することが可能なのかという問いに対し、アイオワ州立大学の織物衣服研究者グループが行ったみやげもののタイプとどのような観光スタイルとが対応するのかに関する調査について引用している。この調査グループは、観光スタイルを①「民族・芸術・人々」、②「歴史・公園」、③「都市型エンターテインメント」、④「野外活動」の四つに分類し、それぞれの観光スタイルとみやげものの購入が相関していることを明らかにした（橋本 2011: 33–35）。このうち、本稿にとって示唆的なのは、①「民族・芸術・人々」を対象にした観光に関する結果である。

7 最も早いのが、1981年に北京の民族文化宮で開催された《全国少数民族服飾展覧》である（段 2004: 375）。その後、1984年には同館で《中国苗族服飾展》が（民族文化宮（編）1985）、1987年には《中国彝族服飾展》（中国彝族服飾画冊編写組（編）1990）が開催された。この展示は後に日本、アメリカ、フランス、旧ソ連、香港などにも巡回した。

8 なかでも大きなコレクションを有するのが台湾・輔仁大学である。輔仁大学織品服装研究所・中華服飾文化センターは、1988年から貴州省のミャオ族衣装の蒐集を開始し、2000点あまりのコレクションを持つ（国立歴史博物館編輯委員会（編）1999）。また大英博物館にはコリガンが収集したコレクションがある（コリガン 2003）。

9 北京の潘家園旧貨市場はその代表的なものである。1992年ごろから形成されたこの市場には中国全土の様々な骨董品が集まるが、貴州省のミャオ族の衣服や布など少数民族の手工芸品を扱う店も多く、ここから世界のアンティーク・マーケットへの販路が広がっている（楊・耿 2006）。



写真2 チェンマイのマーケットで販売されるバッグ
(2024年3月7日撮影)

「民族・芸術・人々」を対象にした観光は、「民族観光・文化観光と重なる。民族コミュニティを訪問し、祭りに参加し、アート・ギャラリーや博物館を訪ね、コンサートや演劇にいき、地域の興味ぶかい人びとと交流する」ものである。そしてこのスタイルの観光を行う者は、「ユニークな工芸品の背後にある地域の製作者の技術を見て、工芸品や製作者についての知識を広げ、地域の文化との結びつきを強める。観光者は繊維や布、陶器、色彩豊かな装飾品に惹かれる」のである(橋本2011: 35)。

「民族・芸術・人々」を対象にした観光はエスニック・ツーリズムと言い換えることができるが、このような形態の観光は、博物館やテーマパークなどのツーリスト向けに演出された空間のみならず、集落訪問やホームステイなどを通じて、より真正な経験・理解を希求する観光者のあいだで、1980年代以降、急速に広まっていった(遠藤・橋本・神田(編著)2019: 164)。そこで重視されるのが「真正性」のあり方なのである。

タイでは国家による山地民の「タイ化」が目指されたことで、医療や福祉サービス、教育がもたらされた一方、結果的に彼らをタイ社会の「最下層」に位置付けることにもなった。「原始的で人里離れた」山地民のイメージが広がるにつれ、彼らはエスニック・ツーリズムの「人気アトラクション」として注目されるようになった。その結果、山地民が暮らす村へのトレッキングが1970年代以降観光者に人気となり、観光者が多く訪れる山地民の村で、刺繍布や染織布、喫煙用のパイプ、その他装身具といった手工芸品の商業化が自然と始まった(Cohen 2000: 13)。

チェンマイにおける山地民観光に関し、コーエンはそこで問われる「真正性」を「交渉可能なもの」として捉える。すなわち、文化人類学者や学芸員といった



写真3 チェンマイで販売される刺繍の布片で構成されるワンピース
(2024年8月24日撮影)

「専門家」にとっては「真正性」の概念は厳格であり、それを真剣に追求することになるが、それ以外の一般的な観光者にとっては、それほど厳密に考えられていないのである。それどころか、観光者の好む商品は、しばしば現地の人にとっても新しい意味を獲得し、民族的・文化的アイデンティティの指標となり、新たな自己表現の手段となることもある。また、商品化されたとしても、そこに内在していた意味が消滅するとは限らず、現地の人びとにとって再解釈されていく可能性もあるとする(Cohen 1988: 383-384)。このような観点からコーエンは、「真正性」がさまざまなアクターの間で交渉可能であるという「構造的」な側面を持っているという立場を取るのだが、本稿で注目したいのは、「一般的な観光客には、真正性が厳密に考えられていない」という点である。

コーエンは、みやげものが難民支援のNGOなど外部エージェンシーの介入を受け、使用する色などに観光者の好みを反映させていったにも関わらず、デザイン面においては作り手であるモンやミエンの伝統性と創造性が担保されているという点から、山地民にとっての真正性を否定しないと結論づけており(Cohen 2000: 64)、筆者も首肯する。ただしみやげものの主流が、ショルダーバッグやテーブルクロスなどの服飾小物や布製品から、西洋ファッション風な衣服へと移り変わると状況が変わる(写真2)。

1980年代ごろから、西洋ファッション・デザインの教育を受けたタイ人のデザイナーによって、刺繍やアップリケが施された布片(patch)を縫い付けたワンピースなどの洋服が販売されるようになった(写真3)。山地民の衣服は、そのまま着るには西洋人にとって色が派手すぎたり、着心地が悪かったり、形が馴染まないといった理由で売ることがなかったからである。コーエンはこの変化を、それまでの服飾小物や布

製品への加工とは区別して「ブティック化 (boutiquisation)」と呼ぶ。そして「ブティック化」が進んだことにより、新たに必要となったのが山地民の古着である。「ブティック化」に必要な刺繍やアップリケの布片は、新たに製作されるものではなく、山地民が着古した衣服から切り取られたものであった。このようにして、この時期から古着の取り引きが拡大していく (Cohen 2000: 95)。

コーエンは、このような「ブティック化」も必ずしも山地民の「本物の」手工芸品を消滅させるわけではなく、むしろ新たな用途の拡大によって彼らの物質文化の保存や彼ら自身が参画する新たな生産ラインの創出に繋がっていると捉えるのだが (Cohen 2000: 97)、しかし、これら古着がどこからもたらされたのかには言及しておらず、その作り手がどのような人びとなのかも明らかにしていない。

これに対し、これら古着がラオス経由で中国雲南省から仕入れられていること、それらがモンのものであることがユンによって明らかにされる (Yun 2010)。チェンマイで販売されるみやげものがはるばる中国から運ばれていることは、みやげものの生産が、それが販売されている観光地だけで完結していないことを実証している。エスニック・ツーリズムに基づく「真正性」を問われるようなみやげものに関しては、観光者が市場でやりとりする相手は、販売されている品物と密接な文化的つながりがあると思われがちである。しかし現代においては必ずしもそうとは限らず、むしろ遠く離れた場所で生産され、運ばれてくることの方が多い (cf. 鈴木 2018 ; Hitchcock 2000: 5)。

それでは、なぜわざわざ中国雲南省から運ばれているのだろうか。そしてなぜそれはモンのものであるのだろうか。本稿では、コーエンやユンが触れていない中国雲南省での仲介者がいかに古着を収集、仕分けし、チェンマイへと送り出すのかを記述しながら、これを明らかにする。多くの山地民が暮らす北タイにおいては、一般的な観光者にとってそのみやげものがどの民族に由来するものなのかはそれほど重要ではない。そもそも山地民の文化、手仕事についての関心や知識を持たない観光者も多い。しかしながら、それが遠く国境を隔てた場所から運ばれてくるとしたら、その「ルーツ」となる場にいる人びと、具体的には雲南省のモンや仲介者である漢族にとってはどのように扱われているのだろうか。

III チェンマイにおけるモンの手工芸品の商品化プロセス

タイの北部に位置するチェンマイが国際的な観光都市へと発展したのは1970年代のことである。国家によって山地に住む人びとを対象とした福祉や安全対策などのプロジェクトが複数進められるに伴い、ビジネスとしての観光の開発も展開されていった (片山 2006: 125-126)。初期は山地民の居住地へのトレッキングツアーが主であり、現代文明や都市文化とは対極にある「未開」で「色彩豊かな」山地民の生活様式が人気となった。そのうちいくつかの村では、山地民が通りすがりの観光者に、彼らが日常的に使用していた手工芸品を販売するようになった (Cohen 2000: 13)。

北タイでは、1953年に創設された国境警備隊 (BPP : Border Patrol Police) が、国境地域を管轄するタイ国家警察の一分隊として、山地居住の人びとと最初に接触を持った。BPP の活動のひとつとしてボーイスカウトが組織され、滑走路の建設や、学校や道路の建設、医療補助などとともに、「山地民の工芸品」生産を後援する仕組みが作られた (Tapp 1989: 32)。BPP は、山地民の生計手段確立の一環として1965年にタイ国境工芸 (BCT : Border Crafts of Thailand) を設立し、そこがモンやミエンの手工芸品の商品化のための主要な機関となった (Cohen 1989: 71)。

1970年代半ばになると、ベトナム戦争が終結し、ラオスから共産主義勢力 (パテート・ラオ) に追われたモンが難民としてタイに大量に移入してきた。1970年代後半のピーク時にはその数6万人に達し、当初は6つの難民キャンプに分散して収容されていた (Cohen 2000: 35)。難民の基本的な支援は国連高等弁務官が担っていたが、教育や保健、福祉の分野ではいくつかの国際的 NGO の支援があった。このような NGO が難民の収入源として手工芸品の販売を行うようになった。難民であるモン自身はキャンプから出ることができなかったため、NGO や民間の仲介者を通じて販売するルートが構築された。その後、いくつかの NGO によって本格的にモンの手工芸品の生産と販売を促進することを目的としたプロジェクトが開始された (Cohen 2000: 60)。製品の主な顧客は、最初はタイに住む外国人であり、バンコクのインターナショナル・スクールの敷地内で毎月開催される山地民セール (Hill Tribes Sales) などで顧客を獲得した。その後、チェンマイのタイ山地民工芸 (Thai Tribal Crafts) などが

外国人観光客向けに販売するようになり、手工芸品の輸出も手がけるようになった。特にヨーロッパへの輸出はいくつかの NGO の主要な販路となった (Cohen 2000: 38)。

1970年代以降、エスニック・ツーリズムの需要が高まるにつれ、トレッキングで人気の高い山地民の村で、手工芸品の商業化が自然と始まった。なかでも、チェンマイ市を見下ろす山の上にあるモンの村ドイ・プイ (Doi Pui) はその中心的な存在であった。ドイ・プイのモンは当初は主に自分たちで作ったものを売っていたが、次第に他の山地民のものや、ラオスからの難民であるモンの製品も扱うようになり、後にはインドやネパールのものも含め、多様な布製品、手工芸品をみやげものとして扱うようになった (Cohen 2000: 13)。

また、1971年に設立されたオールド・チェンマイ文化センター (Old Chiangmai Culture Center) が山地民にとっての最初の都市拠点となり、雇用機会が提供された。創始者のクン・オン・チュティマ (Khun Oon Chutima) は北タイの伝統的なランナー文化¹⁰を守り、伝えたいという考えのもと、センターを長年にわたりランナー文化のパフォーマンスやダンスの披露、文化紹介の拠点としてきた。文化保護に重点を置きながら、ケータリング、ウェディング、会議施設などのサービスも提供している¹¹。ここで山地民の被雇用者は踊ったり歌ったりといったパフォーマンスで月給を得たほか、手工芸品をみやげものとして販売することで収入を増やした (Trupp 2015: 155)。

1970年代初頭には、チャン・クラン (Chang Khlang) 地区にナイト・マーケットが設立された。ナイト・マーケットには露店や小さな商店が立ち並び、山地民の手工芸品もここで販売されるようになった (Trupp 2015: 155)。ドイ・プイのモンもナイト・マーケットの主要な出品者となり、国内外からの観光者を対象とするようになっていった (Cohen 2000: 13)。

以上のように、チェンマイにおける1970年代初頭からの山地民の手仕事のみやげもの化は、タイ国家による山地民に対する政策、隣国ラオスからのモン難民の流入、エスニック・ツーリズムの興隆といった様々な要因によって展開されていったことが分かる。この

時期は、ショルダーバッグやテーブルクロスなど、みやげものにして持ち帰りやすいサイズや日常的に使える服飾小物への加工が多かった。その過程には、NGO などの外部エージェンシーが関わったものの、刺繍は当地のモンやミエンの人びとが行っていた。

しかしながら、1980年代から1990年代にかけて、手仕事が一時的に衰退する。この時期、難民の第三国への移住やラオスへの本国送還が開始され、モンがタイから徐々に去っていくこととなった。彼らが去った後、山地民の手工芸品の生産は活力を失い、停滞期が訪れることとなる (Cohen 2000: 14)。

その後、また新たな展開を迎える。さらなる顧客の獲得と販路の拡大を目指して考えだされたのが、コーエンが「ブティック化」と呼ぶファッションとの融合を図ったものの開発で、タイ人のデザイナーによって作られたものだった。「ブティック化」とは、欧米からの観光者に馴染み深い「ポップ・ファッション」に、山地民の衣装から切り取った刺繍などのパーツを組み合わせることで、新しい購買層を掘り起こそうというものだった。観光者にとって山地民の衣服をそのまま着用することには抵抗があるため、西洋の文脈に合わせてそれらを再構成する必要があったのである。その際に多用されたのが刺繍やアップリケ部分の布片である。チェンマイのナイト・マーケットで人気となったのがリネン素材のシンプルなワンピースで、その胸元にモンやミエンの刺繍の布片が縫い付けられた (Cohen 2000: 91-93)。

この「ブティック化」の展開によって、新たに大量に必要となったのが山地民の古着である (Cohen 2000: 95)。チェンマイ近郊だけでは需要に適った数の古着を収集することが次第に困難となり、はるばる中国雲南省文山から運ばれることとなるのである。

IV 雲南省からの古着の流通

雲南省文山では1990年代ごろから、モンの村々を回り、古着を買い取る漢族の仲介者が現れ始めた。調査のために筆者が2007年以降長短期にわたって滞在していた村にも、2004年に漢族の仲介者が来て、古いスカートを1枚20〜30元¹²で買い取って行ったこと

10 1292年に成立したとされるタイの「ランナー王朝」時代に育まれた文化。現在のチェンマイがその都であった。

11 「Old Chiangmai Culture Center」<https://oldchiangmai.com>、2024年12月27日最終閲覧。

12 2004年のレート換算で260〜390円。

があったという。また筆者は2008年ごろ、定期市で古着のスカートを回収している仲介者の姿を時折見かけていた(写真4)。彼女らは露台を出すわけでもなく、ただスカートの入ったズタ袋をいくつか置いて路地に立っているだけである。そこへ農村から来たモンがスカートを持ち込む。すると仲介者はスカート1枚につき30～50元の現金か、工業製の化繊布で製作された新品のスカートと交換するのである(宮脇 2017: 162)。

文山の農村地域に居住するモンは、1980年代から本格的に商品作物の生産を始めていたが、2000年代初頭は沿海部に出稼ぎに行く人もまだ限られており、現金収入が依然として乏しい状況にあった。それでも村人は子供の学費だったり、年老いた親の薬代だったり、なにかしらの現金を常に必要としており、着なくなった古着を売ることは当面の現金を即時的に得られる良い手段であった。しかし当時、二束三文の現金と交換された古着がその後どうなるのか、蒙の人は知る術もなかった。

ここでは、文山でどのように古着が収集されているのか、その仕分けの論理に注目しながら、仲介者の実践を詳述する。なお調査データは2017年9月、2018



写真4 文山の定期市で仲介者に収集された古着のスカート (2007年2月11日撮影)

年3月と8月、2019年8月にそれぞれ1～2日の参与観察およびインタビューを行なって収集した。

1 文山での古着売買の始まり

Yと知り合ったのは偶然である。それまでも筆者は、蒙の古着を買い取る漢族の仲介者の存在は知りつつも、警戒心の強い彼女らに対し実際に話を聞ける機会を得られずにいた。そのようななか2017年9月に、通りがかった歩道でたまたま蒙のスカートを10数枚広げて日干ししている若い女性を見かけた。それがYである。Yは自宅兼店舗である4階建の建物の前の道路で古着のスカートを干していたのである(写真5)。彼女は漢族で、両親の仕事を手伝う形で少数民族の衣服を収集し、梱包して、タイへと輸送しているとのことであった。

Yの話によると1990年代ごろからモンが織る大麻布が高く売れるとの噂が立ち、漢族がこれを農村で収集し転売することを商売にし始めた¹³。Yの母親は文山チワン族ミャオ族自治州硯山県の農村出身の漢族である。Yを含む3姉妹を産んだが、男児を産めなかったという理由で離婚、その後湖南省出身の同業者の漢族男性と再婚し、夫婦で商売に従事してきた。当時、湖南省や四川省からもこの商売をしに漢族が来ていたようである。

かつては食べるのにも困窮しており、Yの母親は様々な商売を行ってきた。Yの幼少期には草果(学名: *Lanxangia tsaoko*) や三七ニンジン(学名: *Panax notoginseng Berk*)、蟻など漢方薬の原料となるものを



写真5 自宅兼店舗前の道路で古着の日干しをするY (2017年9月4日撮影)

¹³ ただし当時なぜ大麻布に高値がついたのか具体的な理由は不明である。どこに転売されていったのかも定かではない。Yは今と同じようにタイに運ばれたのだらうとも、モン以外にも大麻布を必要としていた民族がいて、彼らに売っていたのだらうとも言う。



写真6 大麻布にろうけつ染めと刺繍を施したスカート
(2018年3月9日撮影)

売買していたが、2005年ごろからモン的大麻布を扱うようになった。

モンは伝統的に大麻を栽培し、それを糸にして織って布にし、衣服に仕立ててきた。上衣には1980年代ごろから工業性の綿布が使用されてきたが、女性のスカートは長らく大麻布で仕立てられてきた(写真6)。スカートに使用されるのは、幅約1尺(約33.3cm)、長さ1丈4~8尺(約5~6m = 4 *dlangx*¹⁴)の平織り的大麻布である。これが大麻布一巻きのサイズである(写真7)。蒙ンのサブ・グループによってそこに施す装飾が異なり、未染色の生成色のもの、藍染めしたもの、藍によるろうけつ染めをしたもの、刺繍やアップリケが施されているものなど、ひとくちに大麻布と言ってもそこに施される技法によってバリエーションがみられる¹⁵。

当時、このような大麻布や大麻糸に高値がつき、これを売買する漢族が文山地域に入ってきた。しかしその後、大麻布の値段が半額ぐらいに下がり、それで損害を被って商売を辞める人も出た¹⁶。そのようななか、母親が村に買い付けに行った際にモンが古着のスカートを持ってきた。試しに売って見たらよく売れたので、それからスカートなどの衣服も取り扱うようになったという。それまで衣服になる前の布の状態が商品になっていたのに対し、着古した衣服が商品として取り



写真7 ろうけつ染めを施した大麻布一巻き。スカートに加工される(2018年8月24日撮影)

引きされるようになったのである。

当初Yたちは蒙の村々を訪ね、1枚ずつ衣服を購入していた。Yも継父と一緒に買い付けに行くことがあり、スカート1枚5~10元で買い取っていた。当時の蒙の人のびにとっては貴重な現金収入を得る機会であったが、それは末端の価格を考えると非常に安値でもあった。そのうち、これが商売になることに気づき、蒙のなかから仲介者となる者も出てきた。ただし国外にまで販路を持っているのは漢族であり、蒙の仲介者は近隣の村から集めたものを漢族の仲介者に売るのみであったという。

かつては文山ではこの仲介業に20家族ほどが従事していたというが、2019年時点ではYの家族のみになっていた¹⁷。

2 古着の収集

Yは小学校に2年しか通っておらず、商売に忙しい両親のもとを離れ祖母の家に預けられて育ったという。14歳の時に友人とアイス屋を開くなどして自立するが、母親が体調を崩したことをきっかけに20歳の頃に家に帰り両親の商売を手伝うようになった。母はラオスに行っていることが多く、継父も買い付けなどで不在にしていることが多い。Yは主に文山にいて、古着の仕分けと発送作業を担っている。Yによるとこ

14 1 *dlangx* は、両腕をまっすぐに伸ばした長さで、*dlangx* はそれを指す蒙語の身体尺。4 *dlangx* で約6mになる。なお織機にかけられる経糸の長さは、通常12 *dlangx* (約72m) か8 *dlangx* (約42m)が多く、スカート1枚に8 *dlangx* の布が必要となる。

15 なお文山地域では蒙以外に大麻を栽培する民族はいなかったとされる。

16 高値で取り引きされていた頃は大麻布一巻き(ヨコ約33cm×タテ約600cm)で40~50元だったという(1990年代後半のレート換算でおよそ700円前後)。

17 その理由として、文山に売れるような手仕事の衣服がなくなってきたというのが挙げられる。

れは1人でできる商売ではなく、家族単位で行うものである。

かつては父や母とともにモンの村に買い付けに行っていたが、最近は持ち込みをしてくる人も多い。Yたちが村を訪れた際に、知り合いになった人たちが直接持ち込んできたり、仲介者となってある程度の数をまとめて持ってきたりするようになったからだ。ただしモンの服であれば何でも買い取るわけではない。買い取りの様子を事例から見ていこう。

事例1：2018年8月24日

邱北県¹⁸から30代のモン男性が古着を売りに来る(写真8)。以前、Yの両親が自分の住む村に買い付けにきた時に知り合いになったと言う。男性は広東省に出稼ぎに行っていた時期もあったが、慣れずに2ヶ月ほどで戻ってきた。現金収入のため古着の転売を始めて10年ほどになる。店を訪れたがYが不在だったため電話をし、Yが帰ってくるのを店の前で30分以上待っていた。

彼は予めスカート、前掛け、上衣というアイテムごと、そして手仕事があるかどうかである程度古着を仕分けしてきていた。それに対しYは、容赦なく要不要を判断し、瞬時に値段をつけていく。未染色の大麻製のスカートは50元、綿布製のものには20元という値段がつけられていく一方、手仕事が見られないもの、汚れているもの、あまりにも着古されているものには5元の値がつけられる¹⁹。それに対し男性は「これは10元だろう！」と反論するが、「いや、汚いから5元だ」とやり込まれるというやり取りが繰り返される。特に汚れのひどいスカートは男性が「大麻製だ」と主張しても、「5元でもいらない！ ごみ箱行きだ」と手厳しい。何度も値段の交渉が行われた末、38着に計794元の値段がついた。売れなかったものは男性が持つて帰ることになる。

男性と一緒に来ていた女性が持ち込んだものに対しても同様のやり取りが行われ、計830元の値段がつけられた。

県外からわざわざやってきた彼らに対し、Yは手厳しく査定をしたのだが、この買い取りでは、まず大麻



写真8 男性から買い取った古着の上に座るY
(2018年8月24日撮影)

で織られた布かどうか、ろうけつ染めや刺繍などの手仕事があるか否か、そしてある程度の状態の良し悪しが判断の基準となっていた。モンの古着だからといって何でも買い取るわけではなく、そこには収集の論理が働いていることが分かる。

ただし相手によっては買い取りの基準が緩められることもある。もうひとつの事例を紹介する。

事例2：2019年8月28日

近隣の村から72歳のモン女性が売りに来る。背負い籠に脚絆3セット、飾り帯2本、スカート1枚、上衣1枚だけを持ってきていることから、仲介者ではなく個人で持ち込みをしてきた様子が窺える。事例1の場合とは異なり、Yは女性と世間話をしながら穏やかな雰囲気ですぐに値段をつけていく。スカートは化繊布製で手仕事が施されていなかったが5元で買い取った。また飾り帯も機械刺繍の布を使用したもので、Yは「いらないよ」と言いながら1元の値段をつけた。上衣にも手仕事は見られず、明らかに最近購入した既製品のものだったが、Yは全てを計50元で買い取った。なぜ手仕事がないのに買い取るのかと言う筆者の問いに、Yは「どうせ彼女にとっても不要だから」と答えた。女性は持ち込んだものを売った後、店内に無造作に積み上げられている古着をいろいろと手に取り、そこに施されている手仕事を眺めていたのだった²⁰(写真9)。

¹⁸ 文山チワン族ミャオ族自治州の管轄下にある県のひとつ。

¹⁹ 2018年の中国元の換算レートは1元＝約16円である。

²⁰ なおYの店にある古着は、希望すれば小売もしてくれる。



写真9 Yの店舗の古着を丹念に見るモン女性
(2019年8月28日撮影)

手仕事が施されていないものも買い取ったのは、この女性が高齢だったからか、Yにとって馴染みのある人だったか、たまたまそういう気分だったからなのか、Yの心理は定かではないが、商品のバリエーションを増やそうとしていることは間違いないだろう。文山ではこの20~30年で染織や刺繍をする人が激減し、手仕事そのものが希少になっており、工業製の布や機械刺繍のものが増えていくことは避けられない。

このような文山での手仕事の減少を補うのがベトナムである。Yの母は国境を越えてベトナムのサパ (Sa Pa)²¹に古着の買い付けに行くことも多いという。一時期は定期市に合わせて毎週のように行っていた。ベトナムから仕入れるものの量はそれほど多くはないが、文山で収集したものとは分けて、別の倉庫に保管しているという。文山のモンの人びとはしばしば「ベトナムのモンは自分たちより貧しい、だからまだ染織や刺繍をしているのだ」という、半ば定型化された語りをするが、実際に手仕事が失われつつある文山に比べ、ベトナム側にはまだ手仕事を行う人が多い。Yたちはベトナムで仕入れることで在庫にバリエーションを持たせ、それらをラオスおよびタイへと売るのである。Y曰く「ベトナムに売ることはない。ラオスには買うべきものはない」。蒙の手仕事は、ベトナムを含めて文山に集積され、ラオス、タイへと運ばれるのである。

3 仕分けて梱にする

このように長年にわたって収集された古着の数は、Yの4階建ての自宅兼店舗を覆い尽くすほどの量である。4階の住居部分を除いてほぼ全ての空間に古着がうず高く積み上げられており、まるで倉庫のなかに暮らしているかのようなのである。また主に父親が収集したチワン族のものは別の場所に保管しているという。Yは在宅時には1階のシャッターを開け、仕分けの作業をしていることが多い。筆者が訪れた時はたいてい古着に埋もれながら黙々とそれらを仕分け、梱包作業を行っていた (写真10)。

Yは古着をきれいに整え、梱にしていく。ある日には前掛けの紐部分をはさみで切る作業を延々と行っていた (写真11)。少しでも荷物の重量を減らすために紐部分を切っているのだが、この作業からは前掛けがもはや衣服として使用されないことが分かる。前掛けをそこに施されている刺繍の技法や模様、サイズによって分類し、10枚ごとに紐で束ねる。Y曰く、根気のいる作業で面白くはない。

店内に積み上げられた梱には、中身が何であるかがペンで記されている。例えば、「新紅花裙 60 (赤を基調とした刺繍のある新しいスカート 60枚)」「綿麻裙 50 (綿麻製のスカート 50枚)」「紅色圍腰 600 (赤色の前掛け 600枚)」「白小小尾巴 650 (白色の小さい飾り帯 650枚)」「苗背帶 110 (ミャオ族の背負い布 110枚)」といった具合である (写真12)。その情報からは、スカート、前掛け、飾り帯、背負い布といったアイテムの種類、その新旧、基調となる色、素材などが分かるようになっている。

梱は、Yたちが取り引きしているラオス側の仲介者からの要求に従って作られる。例えばモンが織る布の中には、上述の「綿麻裙」のように、タテ糸に綿糸を、ヨコ糸に大麻糸を使用したものがある。一見するとタテ・ヨコとも大麻糸だけで織られた布と区別が付きにくい、「彼らが大麻布を欲しいと言えば大麻布を、大麻と綿の混合布が欲しいと言われればそれを探してくる」のだという。また彼らが必要としているものはその時々で明確であり、たとえ長い間売れ残っているものを安くすると持ちかけても、必要ないと言われるのだという。

Yは、「私たちは彼らが必要としているものだけた

²¹ 中国との国境に近いラオカイ省にある。標高1600mに位置するため、植民地時代にフランスによって避暑地として開発された。周辺にはモンやザオなどの少数民族が多く暮らし、現在に至るまでエスニック・ツーリズムが人気の観光地となっている。



写真10 古着を梱にしていづ作業をするY
(2017年9月5日撮影)



写真11 前掛けを刺繍の技法や模様、サイズで
揃えて分類する (2019年8月28日撮影)



写真12 梱にはアイテムの情報と数が表記される
(2017年9月4日撮影)

くさん売る。あらゆる種類のものを同時に送るが、今日も明日も彼らが必要としているものは限られている」と言う。取り引き相手からの要求に従って、家や倉庫に保管されている大量の、バリエーション豊かな在庫からそれに適ったものを探し出し、きれいに整えて、数を揃え、梱にしていづのである。

4 国境を越える運搬

仕分けされ梱となったこれらはタイに運ばれる。ユンによると、文山から東南アジアへの販売ルートは2種類あったという。ひとつは、文山から西双版纳州勐臘県の磨憨（モーハン）から国境を越えてラオスのルアンナムター県ボーテンへ行き、タイとの国境のボケオ県フエサイからパヤオ県コヨア（Kod Yoa）を経て、チェンマイやバンコクに行くルートである。これは中国のモンが直接タイのモンに販売するルートだという。もうひとつは、文山から磨憨へ、そしてラオスのムアンシンからサイヤブリへいき、コヨア、そしてチェンマイやバンコクへ行くルートである。このルートでは、磨憨で中国の漢族がラオスのモンに販売し、コヨアの近くにあるムアン・クノー（Mueng Knone）の村

でタイのモンに売る（Yun 2010: 10）。

Yの家族が使用するルートもこれと重なる。Yらは、1回の輸送で梱を50～60送するという。国際輸送で直接送ると値段が高いので、まず雲南省の省都である昆明に託送し、昆明から磨憨に送る。磨憨で待機している母が荷物を受け取り、国境でラオス側から来た人に売るか、車を探して母自身が磨憨からラオスのフエサイまで運ぶという。フエサイを流れるメコン河を隔てた先はタイのチェンコーンである。Yの母はフエサイでタイから来た人に売る。母は通常1週間ほどで帰ってくるが、忙しい時期には2、3日で行ったり来たりすることもあるという。

このように蒙の古着は、何人かの仲介者の手によって陸路で国境を越え、文山からチェンマイへと運ばれていく。そのルートはユンが明らかにしたひとつ目のものと相違なく、これが最適化されたルートであることが分かる。ただ、ユンの記述とは異なり、先述したようにYによると文山でこの販路を持つのはモンではなく漢族とのことである。国境で彼らと直接取引引きするYの母は、商売に必要なモン語を話すことができる。

Yによると、この商売で大事なものはラオスやタイ側の仲介者に「売る」ことであり、そのためには彼らと信頼関係を築く必要があるのだという。それを裏付ける逸話として紹介してくれた話はこうである。数年前まで文山に同業の漢族女性がいた。ある時、彼女はラオスの人に商品を売ったあと、彼らにご馳走をした。しかしその食事の間に売った大麻布を短い布にすり替えたのだという。それが発覚した後、ラオスの人たちはその女性と商売をしなくなり、困った女性はYたちに商品を買って欲しいと持ちかけてきたが、結局Yの母親ともトラブルになったのだという。Yの母親

は、国境を往来するラオスやタイのモンの人たちと積極的に交流し、食事をしたりする。そうした関係のなかで、誰がどのような商売をしており、彼らがどこにいるのかを知るようになり、ネットワークを築いてきたのだという。

この国境を越えた流通ルートは、モンが国境を隔てて広範囲に居住しているからこそ成り立つものである。ただしそこには漢族という他の民族を取り込む柔軟性もあり、このルートがエスニシティを超えた仲介者同士の個人と個人の繋がりによって結ばれていることが分かる。

以上、チェンマイにおいて「ブティック化」が進められ、古着が大量に必要な時期と重なるように、雲南省で進展してきた仲介者Yとその家族の実践について見てきた。文山のモンが織る大麻布が、商品としての価値を持ち漢族の仲介者を惹きつけ、その後古着売買へと展開した。モンの人びとが自家用に製作した衣服は、着古され、漢族の仲介者によって買い取られていく。そして目的に沿って仕分けされ、さらに幾人かの仲介者の手を経て国境を越えチェンマイへと運ばれていくのである。

V モンのものが多い理由

それではなぜ山地民のなかでも蒙ンのものが多いのだろうか。ここではその理由を、先行研究と調査データから考察し、以下の6点にまとめた。

第一に、タイの山地民のなかで最初にみやげもの業に従事したのがモンだということが挙げられる。1970年代に彼らが先駆的な役割を果たしたのは、ドイ・プイが典型的であるように蒙ンの集落がチェンマイ市街地に近かったことや、政府が支援する手工芸品の商業化プロジェクトに早くから参加していたことが関係していた (Trupp 2015: 155)。地理的な状況やプロジェクトへのアクセスのよさにより、みやげもの開発に早くから関わっていたのである。

第二に、同時期に商品化されたミエンの手仕事に比べ、蒙ンの伝統的なデザインは形式的ではないため、商品化された際によりバラエティ展開が可能だったことが指摘される。チェンマイにおいてモンとミエンの手仕事は同時期に同じようなプロセスを経て商品化されたが、次第にその違いが出てきた (Cohen 2000: 70)。モンの方が、刺繍やアップリケの模様のバリエーションが豊富で、デザインに制限がなかったため、み

やげものへの加工の可能性がより大きかった。さらに、モンにはサブ・グループの違いもあったため、より高質的なミエンよりも差別化されることとなった (Cohen 2000: 76)。またYからも、刺繍が一番多い衣服が蒙ンのもので、だからこそよく売れるとの話があった。衣服に施されている刺繍やアップリケの量の多さ、デザインの豊富さとアレンジのしやすさによって、ミエンのものに比べてみやげものに転換しやすかったことが分かる。

第三に、モンは古着の量が他の民族に比べて圧倒的に多かったためである。Yは、モンはチワン族やイ族に比べて1人が所有している衣服の数が多く、毎年デザインが変わるので古いものが次々と不要になるのだと言う。筆者のこれまでの調査からもそのことは裏付けられる。蒙ンの人びとは新年に向けて毎年衣服を新調するが、徐々に着古していき最後はボロにしていく。新年にハレ着として新品をおろしたあと、2、3年は結婚式や定期市に出かける際に着用するよそゆき着になり、5年以上たったものは家事や農作業の時に着用される日常着や労働着に格下げされる。それ以上経ったものは風呂敷や雑巾、手拭きなど衣服以外の目的に使用され、最後は捨てられる (宮脇 2019)。このようにかつてはハレ着かケ着かの違いが、新しいか古いかという基準で区別されていたため、衣服は基本的に保管されることなく着古されボロにされていくのが常であった。そのため古着が多く出るのである。また着古していく際に、そこに手仕事は施されているか否かは重視されない。筆者は調査に入った当初、刺繍やろうけつ染めが施されたスカートがボロボロに擦り切れるまで使用されたり、切り刻まれて手拭きや雑巾として使用されたりしているのを見て驚いたのだが、蒙ンの人びとにとってはかつて自分が施した刺繍をボロにすることにほとんど躊躇がないのである。むしろ、手仕事には長らく「貧困」、「後進」というイメージが付きまとっていた。そのため蒙ンの人びとは、1990年代ごろから化繊布を使用した既製服を、「貧困」イメージから脱却できるものとして好み、次々と新しい素材を取り入れ、デザインを新たにしてきたのである (宮脇 2024)。このような理由で、他の民族よりも古着の数が多く、また手仕事が施されたものを手放すことに躊躇がなかったのだと言える。

第四に、みやげものへの加工を前提としているため、多少質が悪くてもよいことが挙げられる。Yが扱う古着の中には、ジェイムズ・クリフォードの「芸術＝文

化システム」と照らして「伝統的な文化」や「芸術品」といった「真正性」の高いものに相当する流通ルートを通るものも少数ながら存在する。それはヤオ族やチワン族、イ族などのもので、これら民族の古着はそもそも数が少ないため貴重で高く売れるのだという。またモンのものであっても衣服としての質や状態の良いものの中には、アンティークとしての価値を帯びて上海や北京のマーケットに売れるものもある。しかし、Yらの主力商品である古着は、いずれ一部を切り取って加工されるものであり、精巧な手仕事であることが求められず、一部に工業製の布や機械刺繍の布が混ざっていても問題ないのである。上述したように、モンは「貧困」イメージのついた手仕事から徐々に脱却し、市場で販売されている化繊布やレース、ビーズなどのパーツを積極的に取り入れてきた。特に2000年代以降は、手仕事と工業製の部分が混在している衣服が多くみられるようになった。これらはアンティーク市場では価値を持たないが、一部を切り取って加工する目的には十分かなうものなのである。

第五に、モンが国境を越えて居住する民族であるという点が指摘できよう。大量の古着は幾人かの仲介者を経ながら陸路で運ばれていく。この流通経路を形成しているのが、それぞれの地に居住するモンの人びとなのである。この蒙ンの古着の流通は、政府機関等の公式な統計には現れない（Yun 2010: 14）。このようなインフォーマルな取り引きを支えているのが、モン語という共通の言語を話す人びとの個人的な繋がりとの連鎖である。Y一家は漢族だが、母親はビジネスに必要なモン語を習得しており、ラオスやタイの取り引き相手と良好な関係を築くことを重視していた。異なるエスニシティも緩やかに巻き込みつつ、モンが各地に居住するからこそ、はるばる雲南省からラオスを経てタイのチェンマイまでの流通経路が成り立っているのである。

第六に、古着を安い値段で買い取ることができたことが挙げられる。山地で農業を営んできた文山のモンは概して「食べるのに苦労してきた」時代を過ごしてきており、古着を売ることが貴重な現金収入の機会になっていた。Yのところでは古着を売りにきたある蒙の女性は、「私たちモンは着なくなったら漢族に売ってお金にする。それに対して漢族の服は、着なくなったらゴミ箱へ入れるだけ」と語った。たとえ二束三文の値段にしかならずとも、農村で暮らすモンにとっては貴重な現金収入の術であったことは確かなのであ

る。

以上、山地民の手仕事のなかでも蒙のものが多く使用されてきた理由をまとめた。観光開発の初期の段階では、地理的な優位さや刺繍の模様のバリエーションの豊富さが指摘され、さらに「ブティック化」の段階では蒙の着用実践に起因する古着になる衣服の量の多さ、手仕事をボロにしていこうことへの躊躇のなさが背景にあることが分かる。またその国境を越えた流通経路は蒙の人びとの居住範囲の広さに支えられてきた。蒙の手仕事がみやげものへ展開しやすかったのは、このようにいくつもの要因が重なった結果であることが分かる。

VI おわりに

本稿では、先行研究と雲南省文山における仲介者Yの実践の分析を通して、チェンマイで販売されてきた山地民の手仕事をもとにしたみやげものに、蒙のものが多く理由を明らかにしてきた。チェンマイにおいて山地民の手仕事の「ブティック化」が始まった時期に、大量の古着が必要となり、それがはるばる雲南省から国境を越えて運ばれるようになった。ミエンやアカの手仕事に比べて、幾つもの要因の重なりとして蒙のものが選ばれてきたのだと言えよう。

コーエンは、北タイで販売されている山地民の手仕事を元にしたみやげものは、購入者である観光者にとってはその作り手の文化やアイデンティティについてあまり関心が抱かれないものであっても、作り手である山地民にとっては、伝統性や創造性を発揮する余地が残されているという意味で真正性が保たれているのだと論じた（Cohen 2000）。しかし、その原材料となる古着の供給地が遠方になり、国境を越えた距離を幾人もの、時に異なるエスニシティの仲介者によって運ばれるようになると、それが誰にとっていかに真正なものであるのかを問うことは困難となる。みやげものとなるものが販売地から遠く離れた場所から運ばれてくることが一般的になっている現在、それぞれの交流の場面で、その意味やアイデンティティが交渉される可能性を明らかにすることが求められる（Hitchcock 2000）。

では供給地である文山に目を向けると、「それぞれの交流の場面」で意味やアイデンティティがどのように交渉されたのだろうか。仲介者であるY一家は、蒙のものを選択的に扱っていたが、その衣服に付随す

る意味や文化的な文脈にはほとんど関心を抱いていなかった。Y一家にとって、モンの古着を売買するのは生活の糧のためである。収集や仕分けの作業においては、それが大麻製であるか、ろうけつ染めや刺繍などの手仕事であるか否か、状態が良いか否かといった衣服の物質としての情報が前景化されるのみである。売った古着がその後どういうルートを通るのか、誰に販売されるのかにもほとんど関心を抱かない。モンのものが一番よく売れるため、偶発的にそれを扱っているに過ぎない。

一方、文山のモンの人びとにとって、自らの身体から離れた衣服が遠く離れた地で消費されることの影響はどのようなものだったのだろうか。文山のモンの人びとにとって、本来衣服はどんどん着古してボロにしていくものであった。また手仕事には「貧困」や「後進」というイメージが付き纏っており、そこから脱却をはかることが目指されてきた。そのため、モンの人びとも古着を売ることに躊躇することはなかったし、その後それらがどうなるかには頓着してこなかった。チェンマイで販売されるみやげものがモンのものであるという必要性は、幾つかの要因の重なりによって自然に選択されたものだといえよう。

しかしこの20年ほどで染織や刺繍を行う人びとが減り、手仕事を施した衣服はモンにとっても希少になっている。事例2で示したYのところに古着を売りに来た女性が、かつての手仕事をあれこれと眺めていたことから推察されるように、モンの人びとは自分たちの手仕事に決して無関心なわけではない。中国で無形文化遺産登録が進み、失われつつある手仕事を「文化」として見直していく時期に入っている現在、大量の古着の在庫は、今後貴重な文化的なレポジトリになる可能性を秘めている。着用するはずの身体から切り離され、みやげものへ加工するためにそこに付されていたエスニシティや意味も曖昧に取り除かれた衣服が、再びモンの人びとの手中に収まった時、どのように意味が再構築されるのだろうか。

謝辞

本研究はJSPS科学研究費(19K13470)、2024年度南山大学パッへ研究奨励金I-A-2の成果である。また、南山大学人類学研究所共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」(2022~2024年度)での議論が元になっている。共同研究者のみなさま、および建設的なご助言をくださった査読者に感謝します。

参考文献

(日本語文献)

遠藤 英樹・橋本 和也・神田 孝治(編著)、寺岡 信悟・山口 誠・須永 和博・森 正人(著)

2019 『現代観光学——ツーリズムから「いま」がみえる』新曜社。

片山 隆裕

2006 「タイにおける山岳少数民族ツーリズム——歴史的経緯、影響、そして持続可能な観光開発の試み」『西南学院大学国際文化論集』21(1): 113-146。

クリフォード、ジェイムズ

2003 『文化の窮状——二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信・廣田勝彦・清水展・浜本満・古谷嘉章・星埜守之(訳)、人文書院。

コリガン、ジーナ

2003 『中国ミャオ族の織(大英博物館ファブリックコレクション)』近藤修(訳)、デザインクエスチョン。

鈴木 涼太郎

2018 「旅するマトリョーシカ——移動するおみやげのルーツとルート」『観光学評論』6(2): 153-168。

橋本 和也

2011 『観光経験の人類学——みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる』世界思想社。

宮脇 千絵

2017 『装いの民族誌——中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』風響社。

2019 「伝統とファッションのはざまを装う——中国のモン衣装における変化と規範」『ドレス・コード?——着る人たちのゲーム』牧口千夏・石関亮・小形道正(編)、pp. 257-264、京都服飾文化研究財団。

2022 「民族衣装」『クリティカル・ワード ファッションスタディーズ——私と社会と衣服の関係』蘆田裕史・藤嶋陽子・宮脇千絵(編)、pp. 122-128、フィルムアート社。

2024 「フィールドワーカーの布語り、モノがたり第6回 エスニシティを象る装い——中国雲南省のモン衣装の移り変わり」『季刊民族学』188: 76-83。

(英語文献)

Cohen, Erik

1988 Authenticity and Commoditization in Tourism, *Annals of Tourism Research* 15(3): 371-386.

1989 International Politics and the Transformation of Folk Crafts-The Hmong (Meo) of Thailand and Laos, *Journal of the Siam Society* 77(1): 68-82.

2000 *The Commercialized Crafts of Thailand-Hill Tribes and Lowland Villages*. Richmond: Curzon Press.

Cohen, E. and Cohen, S.A.

2012 Authentication: Hot and Cool, *Annals of Tourism Re-*

search 39(3): 1295–1314.

Eicher, Joanne B. and Sumberg, Barbara

- 1995 World Fashion, Ethnic, and National Dress. In *Dress and Ethnicity: Change across Space and Time*, Eicher, Joanne B. (ed.), pp. 295–306. Washington D.C.: Berg

Hitchcock, Michael

- 2000 Introduction, In *Souvenirs: The Material Culture of Tourism*, Michael Hitchcock and Ken Teague (eds.), pp. 1–17. London: Routledge.

Shi, Tian

- 2022 Local Fashion, Global Imagination: Agency, Identity and Aspiration in the Diasporic Hmong Community, *Journal of Material Culture* 28(2): 175–198.

Tapp, Nicholas

- 1989 *Sovereignty and Rebellion: The White Hmong of Northern Thailand*. New York: Oxford University Press.

Trupp, Alexander

- 2015 The Development of Ethnic Minority Souvenir Business Over Time and Space, *International Journal of Asia Pacific Studies* 11: 145–167.

Yun, Miao

- 2010 *Commercializing Hmong Used Clothing: The Transnational Trade in Hmong Textiles Across the Mekong Region*. Chiangmai: Regional Center for Social Science and Sustainable Development.

(中国語文献)

段 梅

- 2004 『東方霓裳——解読中国少数民族服飾』北京：民族出版社。

国立歴史博物館編輯委員会（編）

- 1999 『邊域明珠 苗族服飾特展——黔东南』台北：国立歴史博物館。

民族文化宮（編）

- 1985 『中国苗族服飾』北京：民族出版社。

羅 興貴・楊 亞東（編）

- 2004 『現代苗語概論』貴陽：貴州民族出版社。

楊 群・耿 黔

- 2006 『安神大吉——潘家園旧貨市場苗族群落考察隨筆』北京：作家出版社。

中国彝族服飾画冊編写組（編）

- 1990 『中国彝族服飾』北京：北京工艺美术出版社。

From Second-hand Clothes to Souvenirs:

The Cultural Trade in Hmong Handicrafts

Chie MIYAWAKI*

This paper explores why handicrafts made by hill tribes, particularly the Hmong, are prevalent souvenirs processed in Chiang Mai, Thailand. It will analyze the meaning of ethnic clothing once it is separated from its original wearers.

Since the 1970s, souvenirs made from the hill tribes' handicrafts began to be sold in Chiang Mai, an international tourist city. As the types of souvenirs shifted from small fashion accessories and fabric goods to clothing based on Western-style garments, the demand for second-hand clothes worn by hill tribe increased. The supply source for these garments became Wenshan Zhuang and the Miao Autonomous Prefecture in Yunnan Province, China.

In this paper, I first reconstruct the process of transforming hill tribe handicrafts into souvenirs in Chiang Mai and illuminate how second-hand clothes began to be transported from China to Thailand. Furthermore, I will detail the collection and distribution processes of Hmong second-hand clothes in Wenshan—an area that has rarely been discussed—by focusing on the practices of the Han Chinese intermediaries involved. Finally, I will reveal six factors that explain why the souvenirs processed from hill tribe materials predominantly feature Hmong items.

The cross-border movement of Hmong second-hand clothes can be understood as a natural choice for both the Han intermediaries and the Hmong people of Wenshan resulting from the convergence of several factors. However, in context in which traditional craftsmanship is disappearing, the large stockpiles of second-hand clothing hold the simultaneous potential to become a new cultural repository imbued with renewed meaning for the Hmong people.

Keywords

Hmong(Miao), handicrafts, souvenirs, Yunnan, Chiang Mai

* Nanzan University